（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　麦山　亮太

本論文「職業経歴からみる階層生成過程に関する実証研究――転職経験に着目して――」の目的は、勤務先の変化である転職に着目して、転職経験がその後のキャリアに及ぼす影響を検討し、日本の労働市場の構造的変容を社会階層論の観点から考察することにある。

本論は、計量的実証分析手法を用いる。本分析で用いるデータは、「社会階層と社会移動に関する全国調査（SSM 調査）」と「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査（東大社研・若年壮年パネル調査）」である。

本論文は 8 章から構成される。第 1 章では問題の所在を述べた。第 2 章では、転職とキャリア形成に関する先行研究を丹念に検討した上で、縦断的な観点から転職経験を検討する理論的枠組みを示し、分析に用いる個票データの概要を示した。

第 3 章「転職からみた職業キャリアとその趨勢」では、1956 年から 2005 年の間に労働市場に新規参入したコーホートを対象に、職業キャリアの形成を男女で比較した。その結果、男性は年齢が高くなるにつれて管理職に就く者が増える一方で、女性の場合は同様のキャリアの上昇は認められないジェンダー差が、この 50 年間大きく変わっていないことが明らかになった。第 4 章「転職経験が企業内/企業外での管理職獲得に与える影響」では、転職経験が管理職獲得に不利な影響を一様に及ぼすわけではないが、特に男性の間で、高い年齢で転職し入職した場合の管理職に就く不利さが確認された。第 5 章「雇用形態の移動にみる転職経験の長期的帰結」では、転職経験が及ぼすキャリアへの影響の不利さはこの 30 年間ほとんど変わっていないことが確認された。第 6 章「転職経験と離職率の関連とそのメカニズムの検証」では、だれが転職しやすいのかという個人の属性（異質性）と、転職した事が次なる転職を生みやすい状況依存性について検討した。その結果、両側面が共に重要で相互に影響していることが確認された。第 7 章「賃金への長期的影響にみる転職の効果」では、転職を経験したことによる賃金低下への影響は一時的ではないことが確認された。最後の第 8 章では、戦後 50 年の日本の労働市場を転職に着目して検討した結果、転職することがその後のキャリアに不利である状況や程度に大きな変化は認められず、社会の階層構造についてもその変容は極めて限定的であると結論づけた。

本論は、個人の職業経歴における転職を通して時代を捉え、その時点、時点の労働市場の構造について社会階層論の枠組みから検討した力作である。どの章においても実証データを丹念に分析し検討している点は高く評価され、博士論文としての水準に達していた。その一方で、転職を含む職業経歴を階層生成としてどう位置づけ、社会階層論にどのように組み込んでいくかは、今後の課題として残された。

以上、本委員会は慎重に審査した結果、本論文が博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。